作った、世界は

菜風　龍鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
作った、世界は

【Ｎコード】
Ｎ６０４４Ｙ

【作者名】
菜風　龍鬼

【あらすじ】
『ナマエヲクダサイ』

そして手に入れた名前は”ーーーーーーーーーー”

僕はその名前を使って、”自身のセカイ”で暮らす。

だけど、友達になった人たちはいつも一緒にいてくれない、

だから僕は、友達達を”ーーーーーーー”した

はじまり

さぁ、いらっしゃい、ボクの世界へ。

痛みも悲しみも苦しみも無い”ボク”の世界へ……

―――――――――――――――――――――――

目が覚めたら周りは何も無かった。

目が覚めた？

1人の人間は何も無いトコロにたっていた。

「ココは…？」

1人の人間は何も無い白い空間を見渡す。

「誰かいませんかー。」

ちょっと呼びかけてみる。　　だが返答はない。

「ん？」

返事は無かったけど、何も無いと思われてた空間に何かが落ちていた。

1人の人間はそれを拾う。

それは本のようだった。　表紙には名前を記入する場所があり

中には何もかかれてない白紙の紙があった。

そして最後にペンが挟まってた、1枚の紙と一緒に。

そこにはこう書かれていた。

『君の名前を書けば、君だけのストーリーが始まる』

1人の人間はペンの蓋を開けて表紙をみた。

「ここか…」

そして名前を書こうとして1つの疑問を覚える。

「…ナマエ？　　そうだ、”ボク”のナマエは？」

1人の人間は、頭を抱えて悩んだ。

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーー

ーーーー

本とペンと1枚の紙しかない空間に滞在して何時間たったたであろう
か

いや

何年、何百年たったある日。

「そうだ」

1人の人間はペンを持ち、本にこう書いた。

『ナマエヲクダサイ』

一話「はじめまして　僕の名前は”ーーーーーーーーーーー”」

本がパラパラと開かれ、”世界”の構成が始まる。

＝始まりの都市　～トィ・マラン～＝

白い空間に景色が作り出され、建物が作り出される。

そして１人の人間の空からは１枚の紙が落ちてきた。

■ステータス

【名前】菜風　龍鬼

【タイプ】旅人

【ＬＶ　】１１０

【ＳＴＡＢ】２

【ＨＡＣＫ】１１４

【ＩＮＴ】１

【ＤＥＦ】１０３

【ＭＲ】２

【DEX】61
【AGI】64
【HP】6291
【MP】688
【SP】6084

「・・・・・・・チートすぎるだろ」

龍鬼はむかついて紙を半分に破くとちょうど数値のところが破け・・・

■ステータス
【名前】菜風　龍鬼
【タイプ】旅人
【LV】11
【STAB】2
【HACK】45
【INT】1
【DEF】103
【MR】2

【ＤＥＸ】６１
【ＡＧＩ】６４
【ＨＰ】６２１
【ＭＰ】６８８
【ＳＰ】６０８

「お、これなら使えそうだ。　　、そして僕の名前は龍鬼か・・・」

自身を認めるとその紙は解け、”龍鬼”に絡まる

普通な旅人の服装の上に青いマント

「さぁ、物語の始まりだよ」

そういえば、世界が光りだし”モンスター”が生成される。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー
ーーーー

暖かい明かりが降り注ぐ

そう、ここは始まりの町トィ・マラン

龍鬼が２番目に好きな町。

中央にあるきれいな泉付近には初心者が初めてＩＮするとそこへたどりつく。

泉をじっと見ていると、また初心者が来るのか、キャラクターが転送されてくる。

ただし、泉の上。

龍鬼は立ち上がり、ほんの気まぐれで泉に落下を助けてやろうと足に”力”をためる。

「おしっ」

ちょっと助走をつけて泉に向かって走り、飛ぶ。

がしっといい手ごたえと、水しぶき。

「ほら、君大丈夫かい？」

龍鬼が片手に持っていた・・・

「小銭袋・・・・？」

「・・・・ド・・・」

後ろから声がする

「ド？」

後ろを向くと泉に落っこちた、初心者が俺をみてアワアワと震えている

「泥棒ー！」

「フギャッ」

龍鬼は初心者に水をかけられまくりびしょびしょ

「ちょっ、金は返すから水はやめてっ水はっ」

龍鬼がそう叫べば水しぶきはとまる。

「あーっ、びしょびしょじゃねーか」

龍鬼が半分苛立ちながら言うと泉から出てきた初心者が言う

「お前が悪いんだから、いきなり小銭は盗むし、少ししか入ってないんだから返せっ」

「だから盗んでねーって」

龍鬼は手をだしてあがるのを手伝おう・・・と

「っけっ　ドロボーが」

手をはたかれた。

「・・・チッ、ドロボーじゃねえよ、　菜風　龍鬼だ。新人。」

そういって龍鬼はもう一回手を出す

「新人ちがう、真下だよ」

その手をとった真下。

「んじゃ、お詫びもかねて、フレンド登録でもー」

龍鬼はスキルを使おうと指を鳴らす。

「だがことわっぶはっ」

真下、しゃべっていたら、下から熱風が。

「あーしゃべると噛むぞ」

そういう龍鬼も手から熱風を出していた。

「・・・・なんか凄い人に捕まった予感」

真下がそうボソッというと龍鬼は風を止めて言った

「・・今頃気がついた？」

そういって龍鬼は笑いかけた。

（・・・あー・・・　このゲーム買うんじゃなかった）

「そだ、真下っ」

龍鬼が思い出したと手をたたきつつ言った

「狩いかない？」

「しょうがないな」

真下はそういうとエリアへと走っていった。

「あー、はえー・・・w」

龍鬼も遅れながらついていくと・・・！

2話「初めての友達。　別れ、　そして見つけた“データの山”

「うっわ、スライムの大量発生イベント中だっけ」

龍鬼は青い塊を持ちながら言った。

「わー、何この子かわいい」

真下はスライムの中から大量発生のバグらしい黒いペンギン（死んだ眼をしている）子を発見した。

「・・・ペットにするかい？」

「・・・・っ！」

真下の反応を見て教えてやった。

「その子さ、この付近のレアモンスターだよ、名前はないけどその子に主登録すればほかの子に取られないし殺されることはない」

龍鬼がペットの話をしていると真下と黒い塊はなにかぶつぶついっていた

「スイカペンギン」

「ぺー！」

「・・・はー、登録しちゃったか」

龍鬼はため息をしながら真下の頭をぽんぽんたたく。

「は？」

「あぁ、ペットに名前をつけることが”主登録”だよ」

「簡潔でよろしい」

「ぺー！」

「あれ、何か立場変わってない？、なんかスイカペンギンとの相性よくねっ？　なんかスイカペンギン刀もって俺の方に歩いてくるしっ！？」

龍鬼はスライム達の隙間を走っていく。

「行けっ、スイカペンギン」

「っぺー！」

スライムを気にしないで走り抜けるスイカペンギンは刀を抜き、龍鬼をおいかける

「あ」

「ぺっ？」

真下がそういうとスイカペンギンは動きを止めた、龍鬼も同時に止める

「ん?、どうした」

「いや、そろそろ寝ないと」

真下はそういうと”バイバイ”っと言って消えた

「・・・・・・・帰ったか」

龍鬼はスライムをつかんだ。

「近くの町でも行くか・・・」

龍鬼はさっきよりも暗い表情で歩いていくと看板がみえた

「カルデア・・・行ってみるか」

ちょっと歩くと目の前には”クズデータ”の塊と“バグデータ”の塊があった。

「・・・・君」

龍鬼の足元には淡い青色の明かりがある

「ＮＰＣになり損ねた子か・・・」

龍鬼はデータを改変して”町を作り上げる”

そしてある小屋に淡い青い明かりとともに入り、バグデータと合わせて”人格”と”名前”を持たせた。

そして”生まれた”子は俺を見て言った

「僕は・・・・？」

「君は・・・・そうだね、僕の弟」

龍鬼は床に座ってる人に語りかける

「君の名前は菜風　龍兎」

「りゅーと・・・・？」

「そうだよ、君はこの町、カルデアに住んでるの、この小屋は菜風の家。」

「僕らの家？」

「そうだよ？いつもここに帰ってくるの」

「そんなんだ・・・・」

龍兎は立ち上がり小屋を見渡す。

「龍兎、君の記憶は・・・・」

「ん？、ちゃんとあるよ　龍鬼が助けてくれた事、運営会社に・・・

捨てられたことも」

「・・・・ごめん」

龍鬼はしたを向きつつ謝った

2話「初めての友達。　別れ、　そして見つけた“データの山”（後書き）

次回、龍兎（ＮＰＣ）として作られた時でも短編としてかこうかなとおもってます

短編「ボクの生まれたキッカケ」

「新しい町・・・・そうだね、村・・・いや町がいいかも」

1人の男がpc片手にコーヒーを飲んでいる。

「そうだ、町といえばNPC」

男がカタカタとキーボードを打っていると誰かが部屋に入ってきたようだ。

「よっ、葵」

「誰かと思えば・・・社長・・」

「はい、シャチョーさんですよー」

「あ、社長、例の町のNPCこんなのはどうでしょうか」

葵はカタンっとエンターを押す。

そうすれば画面には男のキャラクターが映る。

「・・・外見はいいね」

社長がそういったかと思えば、画面に「エラーの文字」

「なっ!?」

葵がイスに座り直し、エラーを解除していく

「消えろ、消えてくれ」

はじめはエラーを消す速度が早かったが・・・

「なっ」

次の瞬間、画面いっぱいのエラーの文字。

「・・・葵」

社長がそういえば葵は動きを止めて少し考え、手はパソコンのコンセントを持っていた。

「・・・ごめん」

次の瞬間パソコンの画面が真っ暗になった。

「次はバグなんて作らないようにたのむよ」

社長はそういうとあきれた顔をして去っていく

「・・・・・ハイ」

葵はイスに座りなおし頭を抱えた。

「くっそ・・・っ」

もう一回パソコンをつけると町のデータとＮＰＣのデータを消した。

短編「ボクの生まれたキッカケ」（後書き）

龍兎はこうして作られていた・・・　が葵の手によって消され、あのエリアへと流れ着いた。

短編B「それは、復讐のつもりで・・・」（前書き）

短編の続き、龍鬼サイド

短編B「それは、復讐のつもりで・・・」

このごろ、夜あの小屋へとあしを運ぶと必ず魘されてる龍兎をみる

「これも、アイツのせいだ・・・」

龍鬼は装備をすべて小屋に置き体のデータを崩し、どこかへと消える。

（・・・アイツ、製作者に復讐してやる・・・）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・

一方葵はあの会社をやめ、自宅でパソコンをいじって、自分が勤めていたオンラインゲームを見ている。

「・・・・はぁ・・」

そんな姿をパソコンの“内側”から見ていた龍鬼。

「・・・お前も居場所をなくしたか・・・」

龍鬼は葵の姿を見ると“昔の自分を思い出した”

すっと画面に文字を出す。

オマエ　ハ　コノ　セカイ　ヲ

ステラレルカ？

ＹＥＳ／ＮＯ

迷いつつカーソルが動き出す。

それはイエスをさして・・・

「そっか・・・　なら助けてあげるよ」

龍鬼の目には怒りの色は消え去っていた。

龍鬼は手を前に出すと淡い光が画面から流れてきて・・・　形を作る

「やぁ、葵」

姿をすべて作り出されると龍鬼は話しかける

「・・・・・・・・それは、俺のことでしょうか？」

目をパチパチさせた葵は周りを見渡して一言

「君は葵、ボクの町の一員さ」

短編B「それは、復讐のつもりで・・・・」（後書き）

カルデアの町の一員となった葵・・・・次回は葵、カルデアに降り立つかな

3話「おかえり　そして始めましてと久しぶり」

アレから数日間姿をくらましていた龍鬼。

ある日カルデアの町へと帰ってきたとき、ある人物と一緒にいた。

「・・・・誰？」

「あぁ、龍兎、この人は真下、俺のことドロボーとかいったんだぜ？」

「どッ、ドロボーしたのはマジじゃないですかっ」

そういって息を切らしている真下。

「さすがにきつかったかなーカルデアまでくるの。」

龍鬼はキッチンから紅茶をもってきた。

「それらなボク読んでくれればワープしたのに・・・っ」

それを見た龍兎は戸棚から茶菓子をとりだした

「それじゃ、レベルが一向に上がらん」

「そりゃそうだ」

「・・・私をほっておいて話をすすめないでくださいます？」

「あ、ごめん」

龍鬼はそういうともう1つイスをどっかからか取り出す。

「んで、ねーさん、用が2つあるから来いっていってたけど・・？」

「あぁ、新人を連れてきたんだ、龍兎と仲良くここで暮らしてもらおうと」

龍鬼はそういいながら手をたたくと誰かがワープしてくる。

「・・・・・えと・・」

「・・・・見た目、メガネマフラーオタクって言った所かしら」

「真下、葵がびびるからいきなり言うなって」

案の定、葵は固まっていた。

「ねーさん・・・こいつ俺の・・」

龍兎は何かに気がついたようで、こっちを見てくる

「コノ人はね、居場所を求めてこのセカイにきたのさ、今は過去を持ってないからみんな親切にたのむね」

「・・・・・わかった」

「了解、私は真下っていうんだよろしくね葵君。」

龍兎はなにかつっかかるようだったけど納得したようだ。

「それじゃ、ティータイムとしますかっ」

龍鬼がそういえば甘い香りをした紅茶3つとコーヒー1つをもってきた

「「「はーい」」」

四話「ダンジョン攻略　葵　怪我」（前書き）

グロイ表現はいる恐れありなので注意。

四話「ダンジョン攻略　葵　怪我」

ここはカルデアの菜風の家

最近葵も住み始めて騒がしいけど楽しい日が過ぎていく。

「ねぇ、龍鬼」

どっかからかはがしてきた張り紙を取り出して何かしている葵と

「んー？」

紅茶を飲みながらそのチラシを見ている龍鬼

「新　ダンジョン？　ラスボスがドラゴン・・・　レアドロかぁ・・・　、逝きたいの？」

「龍鬼、漢字変換違うから逝きたくないから」

「だってみんなで行ったら確実に逝くよ？」

龍鬼は紅茶を飲み始める

「んー、皆でいけばどうにかならないかなー」

真下が奥から顔をだして答える

「・・・しょうがないかー」

それから数分で支度を終わらした龍鬼たち

「さて、ダンジョン向かおうかー！」

「「おー！」」

「・・・・・・・」

「・・・・龍兎？」

「何？」

「いや、何でも」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

・・・・

・・

そして、ダンジョン前。

「ここか」

近くにいた鳥を攻撃する龍鬼

「なんか凄そうだ・・・」

言いだした葵はダンジョンのでかさにびっくりしているようだ

「・・・・レアドロ」

目が小銭な真下

「・・・・・」

やはり無言の龍兎

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・さぁー！行こうか」

心の中では何か起きそうな予感を感じていた。

それが当たるなんてこのときは思いもしなかったけど。

そして龍鬼たちはダンジョンに足を踏み入れた。

「以外によわっちーなー・・・」

中のモンスターを着々と倒すとラスボスがいる

「っまそれは普通か・・・・」

龍鬼は下へと着々に進んでいると次のエリアでは真下が戦っていた

「エィッ」

そして武器を振り下ろす真下。

敵の上にはダメージが出ている

「・・・・・・・・1」

龍鬼、笑いをこらえるのに必死。

そんな時であった。

壁に寄りかかっていた葵の地点・・・

それに龍鬼はちょっとだけ心の中で引っかかっていた

壁のヒビに気がついた龍兎の叫び声でその引っかかりは取れたわけ

だが・・・

「ばっか葵っ　そこはドラゴンの出没箇所っ」

びっくりした葵を後ろへ投げ、壁を見つめ固まってる龍兎。

それと引き換えに、壁は何も言わずに崩れ去る。

ドラゴンの片手が飛び出した時、龍鬼は龍兎の前に立つ。

「せめてさ、戦うとかしてみようよ」

どこかでドロップした剣を構え、ドラゴンの爪をとめる。

「・・・・っ、何処までいけるかな」

龍鬼は剣を片手に持ち替えスキルを発動させようとすると片側から
ドラゴンの手が来るのがわかった

「ねーさっ」

「龍鬼っ」

「きゅうりっ」

三人の声がするなーと龍鬼は思っていれば次の瞬間には空を飛んで
いた。

「負けた・・・・のか」

真下は飛ばされた龍鬼の体をみた。

「回復しないとっ」

龍鬼の体は、腹の部分をドラゴンの爪で抉られ、結構ヤバかったりしている。

「うあー・・・変な感覚」

もう少しドラゴンに近ければ、胴体飛んだぞっ

遠くで真下がそういってるような気がした。

あぁ、移動魔法かけられた。

そう龍鬼が思っていると思考はだんだん失われて行った。

菜風一家の小屋に着いた時には龍鬼の意識はなくなっていた

「傷は、無理やり塞いだから大丈夫だとは思うけど、データの欠損が大きいかもな・・」

真下はつれてくる際にドラゴンの爪を防いだ時に壊れた武器を見ている

「さすがに武器を一瞬で武器壊す威力を1度は受け止めた龍鬼は凄

い・・・、ところで後ろの男共は何もしないできゅうりに助けられたと・・・・」

2人とも、違う方向をみているがチラチラと龍鬼をみる所、気になっているのは一緒みたいだ

「・・・・2人が喧嘩してなかったら、こんなことにはならなかったと」

真下がちょっと怒り気味

「・・・・だって」

「だってもクソもあるかって」

「・・・・ごめんなさい・・・」

「葵も葵でっ」

「ッハイッ」

こうして小一時間ほど真下に怒られた2人

さすがに無理やりでも仲良くしている2人。

「これで、龍鬼が気になってたこと、1つは消えるかな」

短編「ユメ」

「体が軽い・・・」

真っ白い空間の中そう思っていると空間に龍鬼の声がする。

「・・・・・今日もいつも道理か」

「どっか誰も知らない町行きたい」

「オンラインゲームとかのセカイに入りたいな」

確かに龍鬼の声だったが龍鬼本人はこんな記憶が持っていない・・・

いや

知らなかった。

白い霧が晴れるとそこには・・・・・・・・・・・・

普通のアパートで暮らしている龍鬼がいた。

「・・・・・・・・あ」

そうして、龍鬼の消えた記憶を再現するみたく、その空間で物語は

すすむ・・・・

「・・・違う、これは違う」

そう思えばこの空間は崩れさり、龍兎が俺を呼ぶ声が・・・

（キミハ、マタニゲル）

第五話「おはよう　過去　制御不可能　晴天の青空へ」

「ぬ・・」

「ぬ？」

「葵ーねーさん起きるぞ、その声の大きさだとおきる」

・・・ん？葵の声とうさうさ？

それにしても“腹いてえ・・”

「あ、目覚めた？」

目を開ければ葵のドアップ。

「ギ・・・」

「ギ？儀？　龍鬼なにかの儀でもするの？」

「ぎゃぁあああああああああああああああああああああああああああああ」

龍鬼、葵にパンチを食らわす。

「っつか腹いてえ」

龍鬼が腹を抑えれば、何かが崩れる音がして、血だらけの腹が・・・

「・・・ばれたか」

「・・・ねーさん、どういうことなのか説明ヨロシク」

龍鬼がぼーっと自分の腹を見ていると両端に葵と龍兎

「・・・おねがいしますよ？」

「はぁー・・、俺も今さっき思い出したんだけどね」

そういって腹を触りつつ遠くをみた。

「俺は元はリアル・・・地球でうまれた極一般の学生さ、普通に1人ぐらしをしていた。」

クッションでモフモフしていると腹の傷がふさがってないのか“赤”が移った

「あ、やべ」

龍鬼はクッションを置いて腹に片手を当てて、“治癒”を始めた

「俺はその世界が嫌になり、自殺を図る。　そして気がついたら、『1人の人間』としてコノ空間ができる前・・・・に生きてた」

「・・・じゃあ龍鬼は？」

「この世界を作り出した人だね。　まさに俺がそう」

「・・・・だから、バグデータと成りかけてた僕を・・・」

龍兎は自身の手をみてた

それをそっと取る龍鬼

「でもキミの人格はキミのもの、姿が無かったからキミに“姿と名前”をあげただけ　葵、キミは特別」

くるっと後ろを見れば固まっている葵がいた

「キミは・・・もう知ってるかも知れないけど”龍兎”の製作者の神凪　葵」

「かん・・・なぎ？」

「そう、俺は現世を嫌になった葵を自由があるこの世界につれてきた。」

沿うしゃべっていると龍鬼の体に異変が出る

龍鬼の身の回りからデータを崩し、体に取り込んでいた。

「俺はね、データを操ることができるんだ、だから、何にもできる・・・けど1つだけできない・・・こと」

そのまま下を向いた龍鬼

「ここはリアルでは『オンラインゲーム』として使われてるんだ。俺に許可とらないでさ。

そっちも多少は割り込むことはできるけど・・・リアルの人が来放題なんだよね・・」

そんな時・・・窓から黒い光が来て・・データと混ざり龍鬼の体へと取り込まれた。

「ちなみに真下は普通にリアルの人、だからさ・・・」

そういって笑いかける龍鬼。

そして笑いかけてくれた龍兎と葵

龍兎が龍鬼の頭をなでてた

「なっ　俺の方が上なんだぞーっ」

「いやぁー・・ね」

そんな時、龍鬼の剣が目の前にいきなり現れた

『えっ！？』

次の瞬間その剣は数を増し龍鬼を中心にして大量に発生した。

「ねーさん！？」

数を増した剣と風に飛ばされた龍兎と葵

「何っ！」

「なんなの・・制御が・・・」

龍鬼は中心でしゃがみ込んでいた

剣が増えていくにつれ、突風も吹き出した

「ねーさっ」

家具が飛んでいく中龍兎は龍鬼の元へと行こうと剣の中を突き進む

「駄目だっ、りゅー・・・とっ　力抑えられないっ」

龍鬼はそう叫ぶが突き進む龍兎をとめられない

「くっそっ」

龍鬼は傷ついていく龍兎を見たくない

だから・・・　飛び交う剣を使い外に出た。

「ねーさんっ!!」

「ちょっ!?」

龍兎と葵の声を後ろで聞きつつ、晴天の青空に飛び去る

(さよなら・・かなぁー・・　真下には何もいえなかったな)

第六話「サヨナラ　菜風家の改装」（前書き）

前話で龍鬼が脱走をしたためここから視点が２つになります

第六話「りゅーと　あおい　ましたのはなし」

第六、五話「りゅーきの話」ってススンデイキマス

第六話「サヨナラ　菜風家の改装」

「ねーさん・・・？」

龍鬼が青空に消え去った次の日、龍兎は1人足りない部屋にいた。

その体は乾いた血で汚れていた。

龍鬼が去った後、葵と1つのことについてしゃべっていた。

龍鬼が治療中に、“外から来た黒い光”

アレは確かにバグ。

「バグを取り込んだなんて、ねーさんは・・」

龍兎はリビングへ向かうとそこには葵がいた

「おはよ」

「おはよーございます」

言葉が無い朝食が始まる。

カチャカチャと食器がぶつかる音・・・

そんな時、仮想モニターが開き、真下がＩＮしたことを知らせた。

「・・・言わないといけないよね」

「・・僕らがＮＰＣの類だって事もね・・」

「その前に・・・」

龍兎は玄関があった場所を指差す

「・・・小屋を改築しないとな・・」

その言葉と同時に元気な真下の声が

「なっ玄関が木っ端微塵っ！？」

「お、真下いらっしゃーい」

「イラッシャイマセー」

――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――――

で、なんで龍鬼が？

―――――――――――――――――――――――――――

あー、力暴走させてさ・・・

――――――――――――――

（龍鬼消えた理由説明中）

ーーーーーーーーーーーーー

うそ・・だ・・ろ！

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

いやいや、マジだから

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーー

「龍鬼が・・・」

真下は青空を見上げた

「・・・・・きゅうりのばっかやろおおおおおおおおお」

「・・・叫びたいのはわかるが、カルデアの皆さんびびるからヤメテ！」

龍兎が涙目でとめにかかる。

「んでもどうしようか、この小屋」

「って、変わりすぎです真下先輩」

葵、ひっしで突っ込んでみる

「それにしても、ねーさんいたらデータ組み替えてくれそうだけどなー・・」

龍兎はそういっていると葵がふっと言った

「バックデータ」

「あるかもっ！」

「あのきゅうりならやりかねない・・・」

そういって龍鬼がつかっている本棚やベットをあさっているとなんかクッキーが1枚と紙があった。

「バックデータです。　投げてねっ☆」

葵はその紙にかいてあったことを読み上げた。

「ついで『キラッ☆』しないか」

「だが、丁重にお断りする」

葵と龍兎がコントやっているといつのまにかクッキーと紙を盗んだ真下。

「粉にして、水で固めてから投げるってね・・・」

ネリネリネリネリネリ・・・

そうして外にでて練った塊を投げる

そうして爆発音と同時に新築、３階建ての家がでてきた。

そして・・・

「「ななななななあああああああああなにこのビルはああああああああ」」

第六、五話「名の無き山」

無数の剣と剣をジャンプしながらわたる龍鬼

「…この疲労感どうにかならないかなー」

龍鬼はあれから行く宛ても無く一定の方向へ進んでいた

常時スキル発動状況の龍鬼にとってはそろそろ限界でもあった

「あー…、あの山パワーを吸い取ってくれる体質」

フラフラしながらその山へと足をつけると自身の力を山が吸い取ってくれる

「はぁ」

一息ついたとたん“立つ力も持ってかれた”

地べたに大の字でぶったおれると眠気が誘う

(さぁ、おやすみなさい)

……寝るか………zzzzzzzzZ

ーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーー

一一一

白い霧の中…　いつも道理の夢。

いつからだろうか、この夢をみはじめたのは

龍鬼はただ何もない白い霧の中に立っている

「何もない…」

龍鬼はただずっと……空を見上げ続けた

ただ、空だけを…いつまでも

第七話「新築　龍兎　旅にでる　」（前書き）

英語・・・

第七話「新築　龍兎　旅にでる　」

アレから一週間が過ぎた・・・

2階に住んでいる龍兎は朝日で目が覚めた……

「ね……」

龍兎は片手を伸ばし隣のベットにいるはずの龍鬼を起こそうと手を伸ばすが……

「居ないの…ね」

伸ばした手をだらんと下ろすと葵が入ってきた

「りゅ…っ」

葵の目線の先ではベットに仰向けになって（龍鬼用）ベットに手をだらんとしていた

「葵か、今行く」

龍兎がそういうと立ち上がり洗面所に向かう

「一階でご飯できてますので早めにお願いします」

「了解。」

そのままパタンと扉が閉まる音がすると龍兎は鏡をみつつ、自分の

姉について考えた

黒い塊…アレはバグなのか…？

それに龍鬼の話…　アレにはわかる…俺という人格を再構成したんだから。

「でも…なんで」

鏡に映る龍兎の目には涙が浮かんでいた…

そのとき鏡が曇り、ある風景を映し出す。

「何っ」

その風景は暗い空の上…にいた。

「ね…ねーさん」

鏡に触れようと手を伸ばす龍兎…だが、触れた途端に鏡は元に戻る

「ねーさっ　写してよっ　ねーさんをっ」

龍兎は鏡を叩くが写すのは龍兎の姿。

「……　ねーさん」

龍兎は何かを決めたようで、小さなカバンに最低限の荷物をつめだした。

そして上でガタガタ音がするために様子を見に来た葵と真下。

「何やってるの・・馬鹿兎」

「何って旅支度？」

「あ、そうですか」

龍兎と真下が話している間何かを探し回っていた葵が

「あった」

「葵、ちょと言わなかったけど人の家つかフロアで漁るなつか何があったん？」

龍兎は荷物整理をいったん止めて葵の方向へと進む

「何って、龍鬼が残していってくれたもの？」

そういって見せたのは龍鬼が使っていた…

「超圧縮式鞄…」

龍兎がそういうと葵は続けて言った

「そう、ねーさんが使ってたやつ…」

龍兎はその鞄についている小さな剣のキーホルダーを見つけた

「…、一時間以内に荷物まとめて個々集合で動でしょうか真下」

「ん、議論はないね」

そうして2人各部屋へと行ったらしい。

龍兎は鞄を巨大化させて龍兎の服を詰め込んだ。

「…そうだ」

龍兎は思い出したように1つの本を取り出した。

「これだけはもって行きたいな…」

その本をパラパラとめくると途中で文章が途切れた

「…ねーさんが僕に向けて書いた話…」

最後まで書いてくれなかったけど、うれしかったっけ・・・そんなことをおもっているとラストページに何か文字を見つけた

Ｉｍｐｏｒｔａｎｔ ．．．．ｉｍｐｏｒｔａｎｔ ．．．．ｔｏ
ｂｒｏｔｈｅｒ
Ｍａｙｂｅ ｗｈｅｎ Ｉ'ｍ ｗａｔｃｈｉｎｇ ｔｈｉｓ
ａｇａｉｎ ｍａｙ ｎｏｔ
Ｔｈｅｎ Ｉ ｄｏ Ｉ ｋｎｏｗ ｔｈｅ ｉｄｅｎｔｉｔｙ
ｏｆ ．．．．
Ｗｅｌｌ， ｒａｂｂｉｔ ｄｒａｇｏｎ， ｂｕｔ Ｉ ｗａ
ｎｔ ｙｏｕ ｔｏ ｌｏｏｋ ｆｏｒ ｔｈａｔ ｎｏｗ ｔｈ
ａｎｋｓ， ａｎｄ Ｉ ｓｔｉｌｌ ｄｏ ｂｕｔ Ｉ Ｗｈｉ

ch is I think.

If you get travel, industrial land, "Azugarudo" of "Hyugaam ane" to ask.

Well, my brother .... No, ryuto It's goodbye

「英語とかわからねえ・・・」

龍兎は悩んでいると後ろから真下が来て手紙を見ている

「・・・大事な…大事な…弟へ
もしかしたらコレを見てる時俺はもう居ないかもしれない
それなら俺の正体はわかってるか…
まぁ、龍兎、今までありがとう俺のことを探さないでほしいけど、
どっちでもいいと俺はおもってるけどね。

旅でるなら、産業革命地「アズガルド」の「ヒューガ　アマネ」に

たずねなさい。

じゃぁ、弟…いや龍兎　さよならだ　…だって」

真下が読み終わると龍兎は大陸地図を引っ張りだして　産業革命地
「アズガルド」を探す

「アズガルドはこの地フェルガンドの隣ですよ」

「葵か…行けるか？」

龍兎がそういえばニコリと笑い

「いけますとも」

そうして荷物を超圧縮鞄に詰めて龍兎が持つ。

「さぁ、行こうか産業革命地“アズガルド”へ」

第七話「新築　龍兎　旅にでる　」（後書き）

龍鬼の住処「フェルガンド」
お隣「アズガルド」

・・・・覚えないとナー

第八話「産業革命地アズガルド」

アレから三人はアズガルドへと向かうために歩き続けていたのだが
ある程度歩くとでっかい門があった

「何だろ…」

龍兎たちは無言で通ろうとすると門番が持っていた槍で道を塞ぐ

「お前たちは誰だ」

「・・・だれって菜「っナカゼ　リューキ様か？」」

「いや、俺はお「リューキ様がお帰りに・・っ　ささぁっこちらへ」
いや、だから俺はぁっ！」

門番により龍兎の話を聞かずに3人をズイズイと中へ連れて行く。

そんなときある家から出てきた一人の女がこう呟いていた

「…アレは龍鬼じゃない」

そうしてある小屋の中に連れて行かれた龍兎と葵と真下。

「さぁさ、リューキ様」

「どうぞこちらをお食べください」

「りゅきさまだぁー！」

「師匠っ！」

「おねーちゃ」

小屋には数人の人がいて皆龍兎に近寄る

「いや、だから僕はっ」

龍兎が否定しようと言おうとすると扉が大きく開いた

「皆っコノヒトは龍鬼ではないっ！」

大声で沿う叫べば龍兎の首を引っ張る

「っ、雨音っ　お前はリューキ様の親友だろうっ！？」

「だからわかるの」

冷静にそう答えると龍兎に向かって炎術を放つ

「ちょま髪もえるから止めてってねーさんの手紙の人？！」

髪を燃やされつつ暴れる龍兎

「ほら、龍鬼だったら、防ぐ…はず…　ってねーさん？」

雨音と呼ばれた人は髪がチリチリになった人の顔をのぞく

「…龍鬼に似てる？」

「弟の菜風　龍兎です」

「君が…あの」

雨音がそう呟けばうんっと何かを決意したらしく龍兎の腕を引っ張った

「よし、決めた、こいつ等私のトコで面倒みます。」

「なっ今弟様と・・・「うっさい、じじい共が　高津クリニックでも行って来い」」

雨音がそういえば男共が黙る、その間に龍兎たちを外に連れた。

「えっと・・・龍鬼の手紙の人ですよね・・えっとアマネさん？」

「雨音でいいですよ、えっと・・・」

「葵です」

「了解葵君、でそっちが・・・」

「真下って言います　ヨロシク雨音」

「こちらこそヨロシクお願いします真下」

そう、自己紹介を終わらすとある小屋に付いた。

「ここが、私の家、葵と雨音はちょっと中でまっててて？龍兎にちょっと話あるから」

雨音がそういえば2人は返事をすると中へ入っていった

「・・・ちょっとコッチ来てくれる？龍兎」

そういって小屋の横の物置に入る。

物置だとおもって入ると中は地下に続く道だった。

「コレは一体…」

「ここはチーム“雨嵐”の活動場所かな」

そのままトントンと下へと下がり電気をつけた

「…雨嵐　雨音と菜風　雨　と　風　…　雨　と嵐ね」

部屋に電気がつくとそこは2人分の部屋となっていた。

「龍鬼にさ、ある日突然“切れ紙”数枚もって消えたんだ…　私にだけ書置きがあってさ。」

龍兎は何も言わず聞いていた…ソノ紙切れが自分だと分かってるから。

「書置きにさ、自分に何かあったら弟君を遣すから後少しだけ迷惑

かけるね？　って書いてあったの…」

「そうだったんですか…」

「でさ、はっきり言っちゃって龍鬼は死んじゃったの？」

雨音が涙を浮かべつつ聞いてきた。

「…今は死んではいないはずです」

「なら何故ここに！？」

「龍鬼が世界の始まりとは知ってます？」

「それは知ってる」

「…ある日龍鬼が怪我をしたんです。　その傷を回りをデータを崩して直していると黒い塊が外からやって来て龍鬼に取り込まれた、それから龍鬼は暴走をして、去った」

「…龍鬼が？、それに原因はその黒い塊しか思えない。」

「僕たちもそうだとおもってます、そうして龍鬼を探すために旅に出たのですが…」

「そっか、んじゃ上に戻ろうか」

雨音はそういうと2人である機械にのった

「転送されるよ」

そういえば機械がカウントを始める

4　3　2

「5抜けたよね今」

「黙る。」

「はい」

0になると転送され、ある部屋の中にでた。

「ここはもうさっきの小屋の中、葵達はこっち」

雨音はそういうとスタスタと歩いていった

「ちょま、待ってくださっ」

そのまま階段を降りて目の前には葵と真下がくつろいでいた

「ただいま」

「あ、おかえりなさい」

「うさ、紅茶入れて」

「あ…はい」

龍兎は言われるがまま紅茶を入れだした

「あ、後私もこの旅付いていきますので」
雨音はそういえば空間に切れ目を入れてトランクをだした。
「荷物は私が亜空間にでも突っ込んでおきますので」
雨音がそういえばいち早く龍兎は超圧縮鞄をだして言った
「よろしく、あたらめて、菜風　龍兎だ」
「はぁ、神凪　葵です」
「真下　です、仲良くしましょうか」
「では、龍鬼が消えた時のことを聞かせていただきましたが、タブン龍鬼が向かった先とおもわれるのは４つあります。」
「おっ」
葵がびっくりしていると真下が地図を出した。
「１つは能力の暴走。あのひとの事だから、人里はなれた場所にいるでしょうね…　２つめに能力を吸ってくれる地が２つほどあります。　ソレを考えて　私がおもったのは　この４つ」
そういって真下の地図に記しをつける
１つめは　（逆池）　２つ目は　（山奥にある廃墟）　３つ目は（呪い池）　４つ目は（名の無き山）

２つ目は能力の力だけを抜き取る能力をもった地

だけど・・・４つめは全身の力を引き取る地・・・　　こっちに龍鬼が居れば、死んでる可能性もあります。

雨音の説明をきいていた３人が息を呑んだのを分かった。

「ここから一番近いのは逆池…　ここは空間が捩れまくっていて普通の人は入るとなかなか出られないことであまり人が居ないからもしかしたら居るかもしれません。」

「そうか…ねーさんが居るかもしれないなら俺は行くよ」

「さすがです龍兎、葵と真下はどうしますか？」

「俺も行きますよ」

「私としてはバックアップが向いているんだけどね」

真下がそういえば手を叩き真下に言った

「なら“雨嵐”のブースが各地にありますからソコでバックアップの方もできますよ？」

雨音がそういえば真下は答える

「やっぱり君が…　パートナーはきゅうりであってるかな？」

「流石ですね　雨音　と　菜風　だから　雨　嵐　なんですよ」

「では、私は心置きなくバックアップに回るかな」

真下はそういうと右手を前に出す。

『さぁさ出てお出で私の僕たち』

そういえば死んだような目のペンギン達が大量に現れる。

「さぁ、ペンギン１～４０は地上の探索を、４１～５０までは地下の探索５１～７０までは私と一緒に改造するよ」

真下がそういえばペンギンたちが鳴き始め、真下の床が沈んだ

「真下…流石です、もうシステムを使い始めてる」

雨音がそういえばペンギンたちが使えるものを各自のポケットにしまっている

「これは一日はここにとまりかな？」

葵がそういえば雨音はすかさず言った

「いえ、逆池はここの傍にありますから今日行きましょうか。」

「なら俺と雨音で行くから葵は真下を頼んだ」

「くうっ…　了解です」

第八話「産業革命地アズガルド」（後書き）

龍鬼の居場所として上げられたのが

逆池

山奥にある廃墟

呪い池

名のなき山

龍鬼と会うこと　はできるのか・・・

8．5話「シハイ」（前書き）

龍鬼がついに…

8．5話「シハイ」

「大分寝ていたみたいだ」

ゆっくりと体を持ち上げると空は暗かった。

そして違和感が１つ。

さっきまで吸い取ってくれてた山が気配が違うモノになった。

そして龍鬼の変化。

「なぜ…全身が黒く？」

さっきまで着ていた服は跡形もなく、ラスボスみたいな服になって全身が黒かった。

唯一よかったのは人格は菜風龍鬼のままだっていうことだ。

「力は…制御できる範囲みたいだ、なら地上でここはどこか聞いてみよう」

龍鬼はそうおもうと人の気配がする方向へと歩く。

何時間か歩いていると、ある一人の村人にであった

「うっあっ　悪魔っ　嫌だっ　」

あった早々にそう叫ばれた龍鬼

「ちょっと待ってくださいっ」

「嫌嫌ぁ」

「俺はちゃんとした人間ですからっ」

龍鬼はそう叫ぶと村人はじっと龍鬼を見て聞いてきた

「食べない？」

「たべない、だからここはドコなのか教えてください」

「…ここは世界の端の（名のなき山）　でもここ最近山の中にモンスターが住み始めたんだっ」

そういって龍鬼の後ろを見て目を怖がらせて逃げようとした

逃げようとする村人を見て…

「駄目…せっかく人間を捕まえたのに　このまま帰らせない」

龍鬼の声だと思えない声で言うと村人の手をつかむ

龍鬼がハッとすると何かをつかんでる腕の先には目に光を無くした村人が倒れていた

「俺…が？…こ…ロシタ？」

嫌だといいながら後ろへと下がる…そうして木にぶつかると龍鬼は気をうしなった。

だが、すぐに立ち上りこういった

「やっと支配ができた…」

龍鬼の声だけど何かが違う龍鬼がソコに居た」

第九話「逆池　揺れ　ヒカリ」

あのまま雨音と龍兎は小屋を抜けて出てきたのであるが…

「逆池…酔う」

目の前には空間自体が捩れているエリアがあった。

「ここが逆池、人はめったに入り込まないからもしかしたら龍鬼が居るかもしれない」

「…行こうか」

龍兎は武器を取り出そうとするが…

「あー、聞こえますかー」

「…雨音、真下の声しないか？」

「おーい」

「しますね…」

「無視したら龍兎、お前帰ってきたら黒パン５個焼け」

「真下様ですね…確実に」

「やっと気が付いたか、コレは君達の脳に直接送ってるからさ、んで本題はいると、君達の武器私の方から送るから叫ぶか言うかして

くれれば送るよー」

龍兎はそういうとニヤリと笑い叫んだ

「真下っ短剣2本に腰帯も頼むよ、後ご飯っ！」

そうすれば目の前にはモニターが浮かぶ。

「後で個人にミニ転送機渡すから、　後龍兎っ」

「えっ！？」

「ご飯がどうした、ご飯が。動詞を言えって話ですよ」

「あ、え、う」

龍兎がアワアワしていると腰帯と長剣2本が落ちてきた。

「うっ」

ぶつかる寸前に気が付き落ちてきたのを身に着けた。

「はい、後ご飯　私からのおまけつき」

そういってご飯茶碗が落ちてきてソレを受け取ると上から生米、固まる前のノリが落ちてきた

「・・・・・何これ」

「運がよければ出来上がる」

「なんだと・・・っまありがとう」
龍兎はそういうと逆池をにらみつけた
「…行くか」
龍兎が足を進めていくと回りの空気が変わるのが分かった。
「ここにねーさんが居る・・・のか？」
龍兎は目をつぶって気配を感じ取っているみたいだった
「…いや、居ないかもしれない　よーく考えれば」
そういって雨音はドコからかでっかいマイクとスピーカーを出す。
「りゅうううううううううきいいいいいいいいいいいい居るなら返事しろー」
まぁ、もちろん返事はなかったのだが…
「やっぱり…いないか」
2人が後ろを向いて帰ろうとすると。地震が起きた
「なっ…」
龍兎は膝を突くが雨音がコケル

「雨音っ」

龍兎が手をのばして、雨音をつかんだ。

「ちょ、なんで地震っ」

ゆれに寄って逆池…がまたゆがみ始めた

「龍鬼っソコで別れればもう会うことはできないとおもえっ」

通信で真下から叫び声が聞こえた次の瞬間

逆池の世界が壊れはじめる

そんな時、世界に亀裂が生まれた。

「雨音っあの亀裂に攻撃を与えて外にでる」

龍兎がそういえば、片手で剣を持ち亀裂に向かって剣を投げると

亀裂が崩壊した。

「龍兎っ雨音っ」

穴から現れたのは、葵であった

「ばっかっ、こっちは崩壊するかもしれないぞ」

龍兎がそう叫べが葵は片手をだした

「手つかんでください」

葵がそう手を伸ばすが僕は雨音の腕を伸ばし葵につかませる

「先雨音を頼む」

「了解」

葵はそういうと雨音を引き上げる。

「（っ…力が入らない…）」

両手でつかんでいた木から手がすべり落ちた

「あっ…」

龍兎は声を上げずに落ちていく…

「…ねーさん」

何処からか暗い光がやってきたと思えば龍兎の体を包み込む。

だが龍兎の体は逆池の動きに飲まれて置くに消えた

第十話「真実　噂　」

龍兎は遠くなる光と龍兎の気持ちと反対に龍兎を飲み込む。
だが身を守ってくれてるような黒がマジったヒカリが僕を守ってる気がした。
…後その光がねーさん…龍鬼のような気がした。
「ねー…さ…ん」
龍兎が気を失うとソノヒカリは龍鬼の姿となった
「コイツダケハ…ダメダ」
龍兎を抱え黒い龍鬼は壁を飛び蹴り続けあの穴へと龍兎を投げると葵の腕に捕まるのを確認した
「ヨカッタ…」
そうして形を崩しさっきの光に戻ると消えうせた
一方葵に捕まった龍兎は…一筋の涙を流していたそうだ。
「…ねーさん」

その日の夜

龍兎たちは雨音の小屋に泊まっていた

そして龍兎はある夢をみていた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーー

「い…や…」

夢の中の龍鬼は町に降りて村人たちを石に変えていた

だけど龍兎の目には分かった龍鬼とおもわれる人物の少し上に本モノの龍鬼がいたこと。

そしてこう呟いたことを

「駄目だ…制御が…やっぱり死ぬべきだったのか…」

ーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ここで目がさめた。

すぐに真下を呼んだ龍兎は先ほどの夢を教えたら1つの情報を手に入れることになった。

「名のなき山」の傍にある村に　村人が石に変えられる事件が頻繁しているらしい。

「ソコに龍鬼が？」

真下がそういえば龍兎は苦笑しつつも言った

「たぶん、居るといいな」

そういえば真下はすぐに行かないとと出かける準備を始めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6044y/

作った、世界は

2011年12月11日02時52分発行